

諫早干潟 野鳥誌掲載記事（1998～99年分）

<干潟を守る日 1999」諫早宣言>

(No.621 1999年6月号 p.37)

<堤防閉め切りから二年 ～諫早から、東京から～>

(No.621 1999年6月号 p.37)

<諫早干潟緊急対策本部から>

(No.612 1998年7月号 p.41)

<大規模事業に揺れる現場から 4

諫早をめぐる野鳥たち 長崎県支部 支部長 鴨川誠>

(No.611 1998年6月号 p.32-35)

<諫早からの近況レポート

「見直し」94%—干拓事業を問う住民模擬投票を実施（長崎県支部）>

(No.609 1998年3/4月号 p.53)

<諫早発「干潟は生きている」11月23日探鳥会>

(No.607 1998年1月号 p.39)

● <活動>

「干潟を守る日1999」諫早宣言 (No.621 1999年6月号 p.37)

諫早湾が閉められ2年目を迎えました。この間、国内外を問わず、諫早干潟回復を願う多くの人々の熱い思いにもかかわらず、排水門はいまだに開放されていません。

しかし、諫早湾の閉め切りは、日本の公共事業の在り方に対する国民的な大きな批判を呼び起こしました。昨年春には、干潟や湿地の保全に関心を奇せる全国の多くの方の賛同を得て、諫早湾閉め切りの日である4月14日を「干潟を守る日」とすることが宣言されました。また、干潟と人間のかかわって、干潟・湿地保全の重要性が大きな世論となり、各地の運動はかつてない、大きな盛り上がりを見せています。

(中略)

私たちは、4月14日を中心に、全国各地で干潟・湿地の保全と回復を求める声をさらに強めて、もうこれ以上、坪たりとも干潟・湿地を消滅させ、またその価値を失わせるような開発を行わない、という大きな国民的うねりを盛り上げる必要があります。ラムサール条約締約国会議が開催される今年は、その最大のチャンスでもあります。以上をふまえ、1999年の「干潟を守る日」を迎えるに当たり、以下宣言します。

1. 私たちは、1997年4月14日の諫早湾閉め切りの日を胸に刻みつつ、干潟・湿地の価値を知り、貴重な干潟・湿地をこれ以上失うことがないように、干潟・湿地を守りながら共に生きていく道を選びます。
2. 私たちは、干潟・湿地に親しみ、干潟・湿地を守り、その回復をもとめ、干潟・湿地と共に生きる人々の輪を更に大きく広げて行きます。
3. 私たちは、すべての開発目的を失った諫早湾干拓事業の見直しを行い、直ちに排水門を開放し、干潟を回復することを強く要求します。
4. 私たちは、アセスメント法施行を目前にした駆け込み的な開発事業と、時流にそぐわなくなった従来からの開発計画の強行によって、干潟・湿地を消滅させ、また機能を失わせることに対し、これに抗議します。そしてこれらの事業計画に携わる人々に対し、干潟・湿地の保全を求める国民的、国際的世論に耳を傾け、事業の見直しと干潟・湿地への影響の回避を実現することを求めます。

1999年4月3日

干潟を守る日1999in長崎・諫早干潟
プレ・ラムサールシンポジウムにて公表

● <活動>

堤防閉め切りから二年 ～諫早から、東京から～

(No.621 1999年6月号 p.37)

諫早湾の堤防閉め切りから二年。東京では四月十日、シンポジウム「よみがえれ！諫早干潟」(諫早干潟緊急救済東京事務所他主催、本会他後援)が行われ、水門を開いて干拓地に海水を入れたイタリアと韓国の事例が報告されました。また、諫早では干潟まつり、デモ行進、演劇公演(「虹のたつ海」)、一万人の思い新聞キャンペーンなどが行われ、多くの市民が干潟の再生を求めました。

(保護・調査センター)

● <活動>

諫早干潟緊急対策本部から (No.612 1998年7月号 P.41)

諫早湾干拓事業を様々な分野から検証する報告書 発売中

水質、工学、財政、環境などの専門家が各分野から干拓事業を検証し、問題点の指摘と代替案の提案を行った報告書「諫早湾干潟の再生と賢明な利用」が諫早湾干潟緊急救済本部から発行されました。

執筆者は大学教授、弁護士など各界を代表する専門家16名。諫早湾の現状を憂い、これまでの調査研究の成果を持ち寄り、緊急にまとめたものです。

諫早湾干潟事業を様々な点から冷静に見つめ直したい方におすすめです。

● 「諫早湾干潟の再生と賢明な利用」A4版 183頁 定価2500円(送料込み)

● お申し込み

諫早湾干潟緊急救済本部

〒854-0034

諫早市小野町1100-13

TEL : 0957-23-3740

FAX : 0957-23-3927

● <活動>

大規模事業に揺れる現場から 4 諫早をめぐる野鳥たち

長崎県支部 支部長 鴨川誠 (No.611 1998年6月号 P. 32-35)

●野鳥は環境変化に敏感に反応



1997年4月14日11時48分諫早湾の塩受け堤防に鉄板が次々に落とされた。何事が生じたのか全く知らない鳥たちは、潮の干満リズムに合わせていつもどおり生活していた。

この日の昼間の満潮時刻は13時4分だ。しかし、汀線は動かない。春霞がたちこめる水際でシギ類チドリ類は線上に並んで採食行動をしていたが、満潮時刻には干潟上に向かってばらけだした。

一方、干潟に面した森山町、諫早市小野島町の農耕地上空にユリカモメ・セグロカモメが乱舞し、いつもと異なる行動が潮受け堤防締切当日に観察された。

それから数日後、日干しになった干潟では、ヤマトオサガニ・シオマネキ・アリアケガニなど甲殻類、サルボウガイ・アゲマキガイ・マガキ・シマヘナタリガイ・クロヘナタリガイなどの貝類、ムツゴロウ・ワラスボ・トビハゼなどの魚類が干潟の表面にからだをくねらせた無惨な姿で夥しい死骸をさらけだし悪臭を一面に漂わせ、私の手足にもいやな臭いが染み着いた。

湾内にはトビ・ハシボソガラス・ハシブトガラスがこれまで以上の個体数が集中し群れ、これらの死骸を食べた。生態系の当然の成り行きではあるが、泥質の干潟一面に白骨の死骸が広がる荒野を見て、人間の犠牲になった生き物たちへの哀れみで私の心は痛んだ。野鳥たちは環境変化に敏感に反応している。

私は、諫早湾における鳥類群集の動態と比較するために、有明海湾奥部にあたる佐賀県鹿島市の海岸の干潟、佐賀県東与賀町の海岸干潟(図1参照)に生息する鳥類群集を調査しているが、これらのことについて述べる。

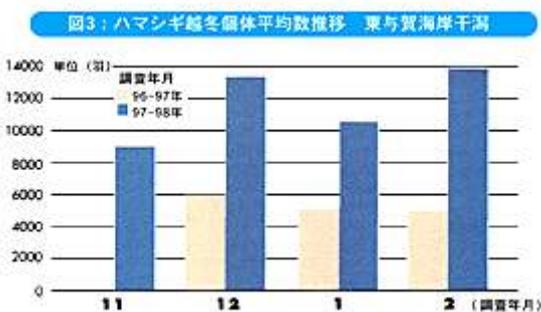


●公共事業で虐げられた鳥たち

野鳥たちの楽園であった諫早湾が、潮受け堤防で締め切れられ、潮の干満が閉ざされ自然環境は一変した。締切直前から、月に数回約300キロの道のりを満潮時刻にあわせ愛車

で走り調査を実施してきた。最も著しく影響を受けたのは、シギ類・チドリ類であることが調査結果を月別に総個体数を平均しまとめることにより明らかとなった。(図2参照)

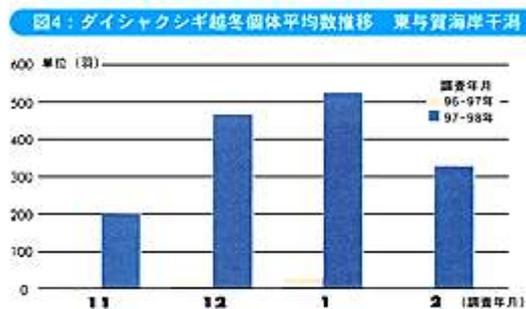
諫早湾では、特にハマシギ・ダイシャクシギの越冬個体数は日本最大で、過去のカウント数は約1万個体に及ぶことがあった。しかし1997年12月から98年2月までの期間は、過去の諫早湾の越冬個体数が佐賀県東与賀海岸の干潟に移動した数値を示している。



つまり干潟及びその汀線を主な生活場所としていたチドリ類・シギ類は、干潟の干陸化が進むにつれ採食地を失い食物不足に困惑する日々が続き有明海内で食物を求めてさまよう行動が観察された。挙げ句の果てにシギ類・チドリ類は、佐賀県東与賀海岸の干潟に集中する結果となった。

越冬個体数が例年にみられないほど集中した東与賀海岸における主なシギ類・チドリ類の越冬種の構成比を平均個体数でみてみると、ハマシギが優占種であることがわかった。例年なら越冬する種数は10種前後であったが、東与賀海岸干潟では6~9種になった。諫早湾では3~5種であり例年より極めて少ない。

越冬できなかった種は、オバシギ、アカアシシギ、ソリハシギ、オグロシギなど少数派が多勢にはじき出された結果となった。多数派のハマシギ個体群を昨冬と今冬を比較すると図3、ダイシャクシギ個体群を同じく比較すると図4のようになる。



したがって諫早湾が越冬地としての機能を失ったために、底性動物を主食とする小型のシギ類・チドリ類は食物不足で生息できず秋に鹿島海岸干潟に集中したが、ここでも食物不足が生じさらに東与賀海岸の干潟に集中するはめになったと考えられる。諫早湾の大規模公共事業により、シギ類・チドリ類が大きな犠牲となったばかりか、隣接する干潟生態系も破壊された。この影響は年を重ねる事に生物相全体に及ぶであろう。人間も生態系の一員であることを忘れてはなるまい。

●行政当局は2カ国間条約・協定は無視か？

日本政府はアメリカ合衆国、ロシア連邦、オーストラリア、中華人民共和国各政府との間で渡り鳥とその生息環境の保護に関する条約・協定を締結しているが、それらを尊重し

ていると言えるだろうか。私は疑問に思う。

各国間での条約における指定種にとって、締切前の諫早湾は重要な生息環境であった。しかもその割合は日米間では 105 種(日本に対する割合 55%)、日ロ間では 186 種(65%)、日豪間では 49 種(64%)、日中間では 152 種(67%) にのぼることを、政府は認識していたのであろうか。

また、このことを国民はどのように考えればよいのか。無視できない重要な問題であると私は受け止めている。

● 諫早湾締切の影響で飛行機と鳥とが衝突する可能性が高い佐賀空港

諫早湾の締切で食物の採食地を失った干潟を主な越冬場所にするシギ・チドリ類やカモメ類・サギ類などが、東与賀海岸に一局集中する結果となったが、ここは 1998 年 7 月に開港を予定している佐賀空港の隣接地である。

1997 年 4 月 8 日から 1998 年 3 月 18 日間の月 4 回の調査の合計を環境別に集計すると干潟に 254、921 個体、汀線に 141、185 個体、水面に 67、855 個体を東与賀海岸の地先から識別できた。

「航空技術」誌によれば東京(羽田)空港で昭和 50 年、51 年に発生したバードストライクは、トビ 2 件、ハト 1 件、カモメ 14 件、カモ 4 件、その他不明 61 件で 82 件が記録されている。

佐賀空港の場合は、予測される鳥種が 65 種と極めて多く、各種の密度も高いことが予測されるので、各方面から多様な調査が必要である。

諫早湾の締切が以上のような形で人間にも影響を及ぼす可能性が高くなってきている。この安全性を考えると「鳥類の採食地の復元」つまり諫早湾の干拓地の面積を縮小し干潟を残し、災害に強い構造物を早急に構築し排水門を開き干満を再生させるような見直しが急務であろうと私は予測している。

● <活動>

諫早からの近況レポート 「見直し」 94%

—干拓事業を問う住民模擬投票を実施（長崎県支部）

（No.609 1998年3/4月号 P. 53）

諫早湾の締め切りが行われ、はや1年が経過しようとしている。干潟の息づかいである干満は停止し、湾内も淡水化がすすみ水位は下がり、汀線も沖へと移動している。

1月15日、今年初めてのカウント調査を行うため、干潟を浅く浸した水面を長靴で進み、強風のなか鳥たちに近づいた。初回は飛び立たせてしまったが、2度目は首尾よくダイゼン456羽、ハマシギ76羽、25日にはツクシガモ279羽、ダイシャクシギ100羽を確認した。

月日が経過すればマスメディアから大事件も忘れ去られやすい。我々は節目の日には検証と喚起を兼ねイベントなどを行い、世論の関心と呼び覚ますよう心がけている。年末には諫早干潟緊急救済本部が、諫早湾商店街アーケードにて国営諫早湾干拓事業の是非を問う「模擬住民投票」を行った。ホワイトボードに「見直し」と「推進」の欄を設け、自分の思うほうに投票用紙に見たてた赤い1円玉大のシールを貼ってもらうものだ。10余人の世話役が通行人に呼びかけた結果、約2時間で822人が投票し、干拓見直しは93%に達し推進は7%だった。署名と違い推進派も意思の表明ができるというのがこのイベントの特徴で、市民の事業への関心の高さと同時に、「干拓は地元の要望」という農水省の言葉に改めて疑問を感じた。

2月1日には長崎県支部も加わって、離島の福江市を除く県内の全市の繁華街で12時から3時まで「7市一斉模擬住民投票」を前回と同じ要領で実施した。シールを手渡す役員には中立を保って特定の方向には誘導しないようお願いし、投票はおとなのほか判断のできる高校生や、次世代に借金を負わされるであろう中学生も対象にした。

事前のスタッフ集めは苦勞したが、中には入会して最初に参加したのがこの活動という方もいらした。私たち役員の行動が支持されているのであろう、最終的には70余名が世話役として参加、県外の自然保護団体の方々も応援に駆けつけていただいた。

結果、合計6991票のうち見直し6547票に対し推進は399票。94%のサイレントマジョリティーの存在に勇気づけられた。

倦まずたゆまずこれからも水門開放まで、イサハヤを考える議員の会や、干潟救済本部他の自然保護団体と協力して頑張っていきたい。（長崎県支部事務局長 執行利博）

● <活動>

諫早発「干潟は生きている」11月23日探鳥会 (No.607 1998年1月号 P. 39)

潮受け堤防が締め切られて約7ヶ月が経過した諫早湾で、11月23日、長崎県支部主催の探鳥会が行われました。事務局長の執行(しぎょう)利博さんより、現地の報告が届きました。

「大支部や鹿児島県支部からの参加者も含めて約40名が集まりました。小野島の定点観察地点は既に干陸化され、水際まで行くにはひび割れた潟土と貝殻などを踏みながら約30分歩かねばなりません。初めて足を踏み入れた方々からは異口同音に、とてつもなく広いと感嘆の声があがり、カメラや望遠鏡などを持つ人には凸凹の大地が腰や膝にこたえたようです。

干満差がなくなった水際にはムツゴロウやカニなども生きており、生物循環のシステムがかろうじて成立しています。滞筋(みおすじ)の水を試みになめるとしょっぱく、10月初めの調査の時よりも塩分が増していました。

昨年の同期と比較すればシギ・チドリ類は一割程度に減っています。例年は200羽も越冬するダイシャクシギはこの場所ではわずか12羽しか見られず、ヘラサギ、クロツラヘラサギ各1羽が渡来していたものの、ズグロカモメも10羽あまり、ツクシガモはこの日は観察できませんでした。残りはどこへ移動したのか。また、他の地でも生きていけるのか。諫早湾を含めた有明海沿岸の4県合同調査を定期的実施するため、関係者に働きかけています。

今回参加された各支部の仲間がそれぞれ見たままを持ち帰り、今後、地元の自然を大切に活動に取り組み、また彼らの地からも諫早を応援していただきたいと思います。

終盤、青空を2羽のマナヅルが悠々と横切っていきました。今秋の初認でした。

報道によると、締め切られた湾内の水は一度真水に近い濃度になった後、秋になって塩分が増えており、工事のミスによる海水流入が起こったとも言われていますが、真相は明らかにされていません。(保護・調査センター)